

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第67輯

母 山 遺 跡

泉佐野市上之郷母山地区土地改良事業に伴う発掘調査報告書

1 9 9 1 . 3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第67輯

も やま 母 山 遺 跡

泉佐野市上之郷母山地区土地改良事業に伴う発掘調査報告書

1 9 9 1 . 3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



母山遺跡から建設中の新空港を望む



第1・2調査区



第3調査区、後方が母山近世墓地

序 文

大阪府泉州地域は、関西新空港の開港を目前として、地域整備的な面から大きく変貌を遂げつつあります。特に新空港を望む泉佐野市は、国際化時代日本の玄関口となるところであり、すでに山沿いを近畿自動車道松原海南線が開通しています。そこから空港へ接続する空港連絡道路も、大阪府教育委員会と本協会によって埋蔵文化財の調査が実施され、一部では道路建設工事が始まっています。

本書で報告する母山遺跡の調査は、以上のような地域の変貌の上に立って、まさに新空港の地元の地域整備事業が契機となって行なわれたものであります。調査の結果は、思いもかけず長岡京の時代の遺物がまとまって得られ、泉佐野地域の歴史に新しい資料を加えることになりました。本地域では、さほど明らかになっていない時期の遺跡が母山の地に存在することの確認は、今後の地域の歴史究明に資すること大でありましょう。

本協会の空港連絡道路の調査も母山遺跡のすぐ西側で実施され、海まで続く長大な調査区は、数々の歴史を掘り起こしております。そして、今後さらに増えると思われまます開発行為に伴う調査も含めて、母山遺跡の調査成果がいずれ泉佐野の古代史の中に位置付けられてゆくことを期待しています。

本調査を実施するにあたっては、大阪府教育委員会、地元泉佐野市教育委員会、泉佐野市農林水産課、大阪府泉州耕地事務所、(財)大阪府農地開発公社などの調整や援助を得、とりわけ上之郷土地改良区と母山地区自治会にはお世話になりました。以上の多くの関係者の御理解・御協力に、深く感謝いたしております。

今後とも当協会の事業に変わらぬご支援を賜りたく、お願い申し上げます。母山遺跡調査報告書の序といたします。

平成3年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
理事長 仁賀奈 祐吉

例 言

- 1, 本書は泉佐野市上之郷母山地内に所在する, 母山遺跡の発掘調査および試掘調査報告書である。
- 2, 調査は母山地区土地改良事業に伴うもので, 泉佐野市農林水産課の委託を受け, 大阪府教育委員会の指導のもと, (財)大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
- 3, 現地調査は当協会調査課技師・岸本道昭が実務を担当し, 1989年12月から1990年3月にかけて発掘を実施した。整理調査は当協会資料班のもとで行ない, 1991年3月に本報告書の作成を行なった。
- 4, 調査の実施にあたっては, 以下の機関の協力を得た。
泉佐野市教育委員会社会教育課
泉佐野市農林水産課
上之郷土地改良区
母山地区自治会
大阪府泉州耕地事務所
(財)大阪府農地開発公社
- 5, 調査の方法は, 当協会「発掘調査規程」に従って地区割りを設定し, 方位は座標北, 標高はT.P.で表示した。土壌色は小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』1988年(第8版)を用いて命名した。
- 6, 本書に使用した写真は遺構を調査担当者, 遺物は小倉 勝が撮影した。
- 7, 遺物は通し番号を与え, 図・写真に共通するが, 写真だけの遺物もある。
- 8, 調査に係る一切の資料は, 当協会資料班で保管しているので御活用いただきたい。
- 9, 本書の執筆・編集は, 岸本が行なった。

目 次

巻頭図版

序文

例言

第1章 序説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の歴史的環境	3
第3節 調査の方法	4
第2章 調査の結果	6
第1節 第1調査区の遺構と遺物	6
第2節 第2調査区の遺構と遺物	8
第3節 第3調査区の遺構と遺物	12
第4節 試掘調査区の遺構と遺物	18
第3章 まとめ	20

挿 図 目 次

第1図 母山遺跡の位置	2
第2図 母山遺跡周辺の遺跡分布	3
第3図 調査区地区割図	5
第4図 調査区の位置	5
第5図 第1調査区平面・断面図	7
第6図 第2調査区平面・断面図	9
第7図 第2調査区出土遺物	10
第8図 第3調査区平面・断面図	13~14
第9図 石列2, 石造塔婆出土状況	15
第10図 第3調査区, 農道整地盛土出土遺物	16
第11図 第3調査区, 谷地形内出土遺物	17

第12図	試掘調査区断面と出土遺物	19
第13図	遺跡周辺の地形	21

図 版 目 次

図版 1	第 1 調査区の遺構と遺物
図版 2	第 2 調査区全景
図版 3	第 2 調査区の断面と遺構
図版 4	第 2 調査区出土遺物(1)
図版 5	第 2 調査区出土遺物(2)
図版 6	第 3 調査区南壁断面
図版 7	第 3 調査区全景
図版 8	第 3 調査区の遺構
図版 9	第 3 調査区の石列 2 とその遺物
図版10	第 3 調査区出土遺物(1)
図版11	第 3 調査区出土遺物(2)
図版12	第 3 調査区及び試掘調査区出土遺物
図版13	試掘調査区の状況

第1章 序 説

第1節 調査に至る経過

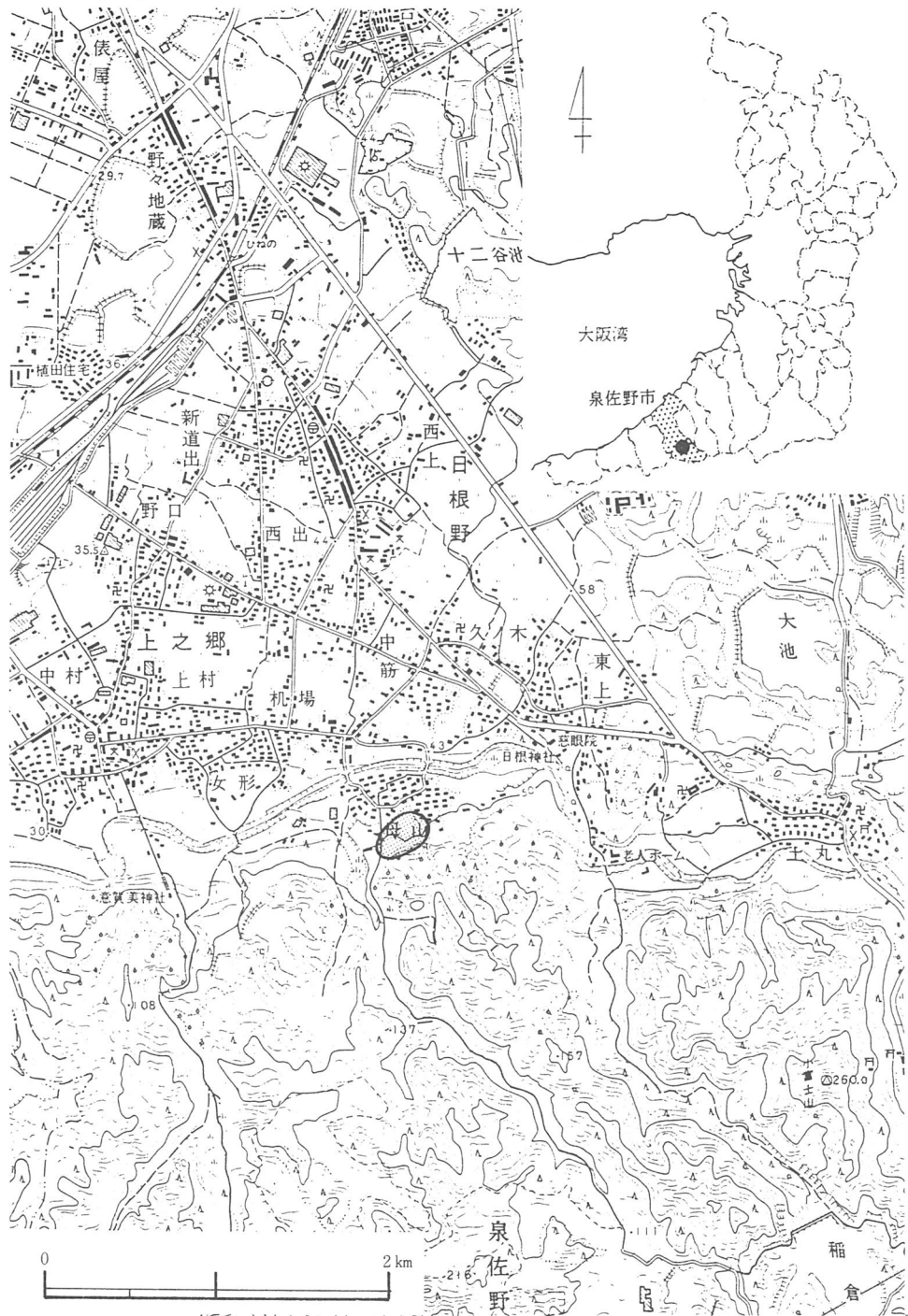
母山遺跡は、泉佐野市上之郷母山に所在する遺跡である。遺跡が周知されたのは最近になってからのことであるが、実態は遺物散布地の域を出るものではなく、不明なままであった。近在の母山近世墓地とされる墳丘は両墓制の埋墓で、長径約30mの楕円形を呈しており、古墳の疑いも指摘されている。しかし、これも1950年代を最後に埋墓としての機能を終え、以後は母山村民によって簡単な清掃と祭りが繰り返されるだけで、起源や構造については明らかにはなっていない。

泉佐野市域において、和泉山脈の裾に位置する上之郷地区は、静かな優良農地を擁する田園地帯であった。しかし関西新空港の建設が着手され、山間を通る近畿自動車道から空港連絡道路が母山地区を出てゆく計画が具体化すると、さまざまな道路建設に伴う問題が地元を巻き込むことになるのである。

まず、本調査に関わる要点だけを記してみると、空港連絡道路の建設で買収された農地の減少に伴う地元対策がある。さらに国際空港の出入口たる、地域一帯の街作りといった議論もなされるようになったのである。そこで地元上之郷土地改良区では、地域整備を含めた優良農地の改良事業を計画し、伴う行政的対応の窓口を市の農林水産課が担当し、関係諸機関と協議を重ねて、計画は前進することとなった。

まず、圃場整備計画地内の埋蔵文化財の取り扱いであるが、周知の遺跡、すなわち東から西ノ上遺跡・川原遺跡・母山遺跡・棚原遺跡について、まず試掘調査の実施が必要とされた。この調査は新空港関連事業として、(財)大阪府埋蔵文化財協会が担当することとなり、1988年度に約50ヵ所の地点が設定された。調査の結果、大阪府教育委員会の指示によって、母山遺跡については圃場整備計画の内、幅員7mの農道部分を発掘調査することとなった。これが本書で報告する発掘調査の契機である。また同年度には、地域整備計画の一環として母山周辺の水路改修事業が計画され、それに伴って川原遺跡の一部を当協会が調査して、中世の遺構・遺物などを得ている。

こうした経過を経ながら母山遺跡の発掘調査は準備が整い、本調査区を3ヵ所、さらに農道部分の試掘調査区を6ヵ所設定して、調査は行なわれることとなったのである。



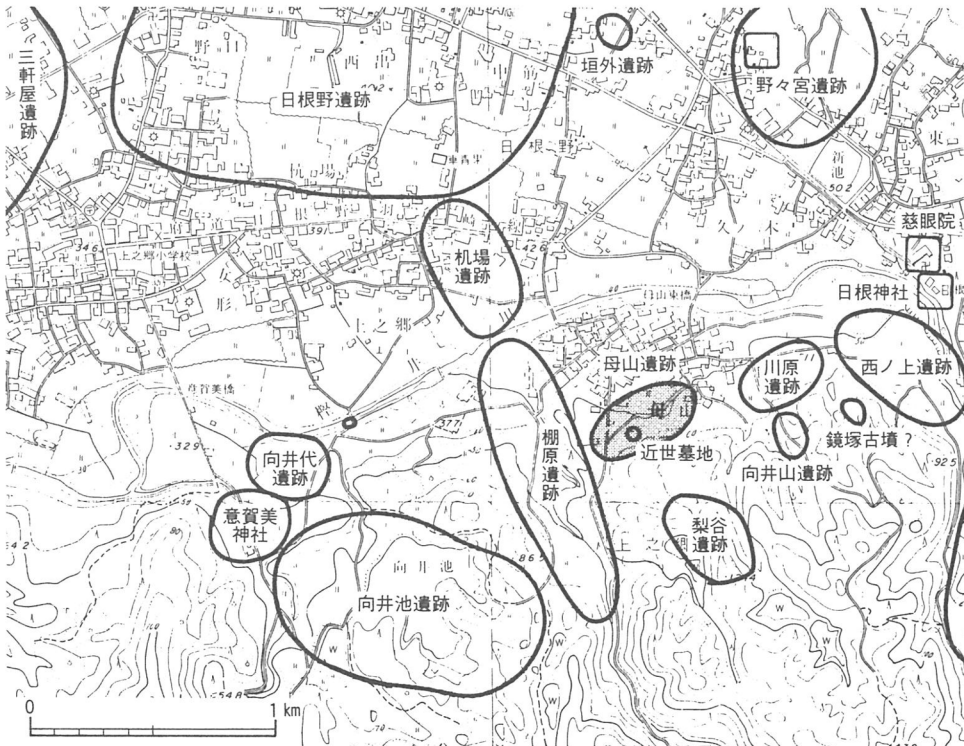
第1図 母山遺跡の位置

第2節 遺跡の歴史的環境（第1・2図）

母山遺跡を取り巻く歴史的環境については、まだまだ不明な点が多い。泉佐野市教育委員会による大小の発掘調査は、確実に泉佐野地域の歴史の一端を掘り起こしつつある。それらの成果を記した調査概報は数十冊を数えているが、年々増加する開発は発掘調査を強要し、歴史叙述に書き足しを促しつつ、歴史資料をさらに濃密にしてゆくことであろう。

また、当協会が行なっている空港連絡道路の全面調査の成果も、近日まとめられる予定である。流動的な調査研究の途上では、遺跡の歴史的環境を記すことは難しい。ここでは以下、泉佐野市域に限って要点をまとめるにとどめておこう。

最近報告され始めたナイフ形石器や有茎尖頭器は、当地の人類の足跡が旧石器時代に遡ることを物語っている。次に我々の前に登場するのは縄紋時代後期から晩期の遺構と土器や石器である。これも遺跡によってはかなり濃密な発見があり、確実に集落の形成を裏付けている。弥生時代にも前期からの遺構や遺物が知られ、本地域はすでに恒常的な人間の生活基盤となっていたことが窺えよう。特に棚原遺跡で検出された中期末頃の竪穴住居群



第2図 母山遺跡周辺の遺跡分布図（大阪府文化財分布図による）

は、性格までは言及できないにしても、丘陵に位置する集落を明らかにしている。

古墳時代になると三軒屋遺跡で集落の存在が指摘でき、近年の最大の発見は、従来市域内では確実なものが知られていなかった古墳も確認されたことである。古墳の周溝から出土した豊富な形象埴輪と須恵器類は、今後の歴史的な位置付けを期待させる。問題は、この古墳がどのような系譜の上に成立し、いかなる経済的・政治的基盤を示すものなのかということである。西隣の泉南市域には比較的多い古墳群との関連も興味深い。

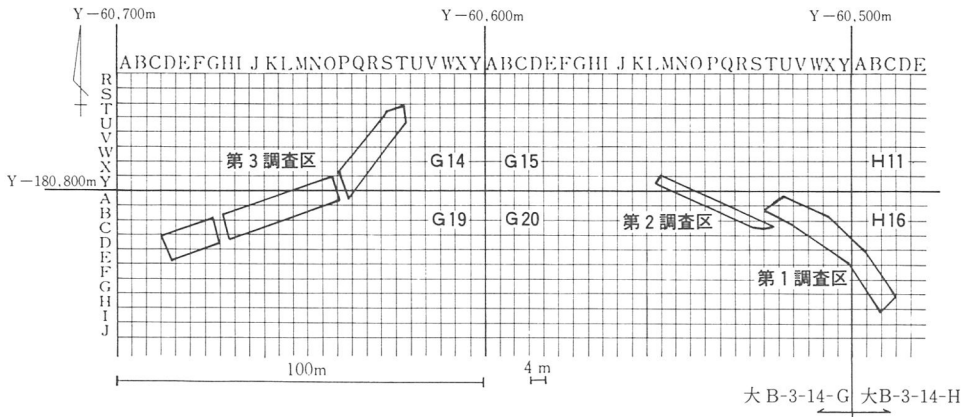
奈良時代はやや不明確であるが、母山遺跡で検出された長岡京期の遺物は新しい資料として注目される。また母山遺跡のすぐ近在には、ともに延喜式式内社である日根神社や意賀美神社が著名であり、これら祭神の起源や「日本書紀」に記す衣通姫伝承などが注意される。日本史の中では注目される日根荘の以前にも、地域固有の信仰や開発の地域史があって、今後は考古学的研究が歴史への発言力を内在するものであろう。

平安時代以降、中世にかけては市内全域と言っても良いほど遺物が検出される。最近では平安時代の瓦窯跡も発見された。五摂家のひとつ九条家の荘園として、「和泉国日根村絵図」などととも中世以降の本地域は著名であり、考古学的調査で当時の農村風景を描きだすことが可能になりつつある。遺構も中世・近世の農村や屋敷地を想定させるものが検出され始めている。いずれにしても中世以降の泉佐野は、貴重な絵図や文献資料の残る地域であり、開発の代償として失われゆく景観と考古資料が、皮肉にも歴史を考える格好の題材として将来の研究を待つことになっているのである。

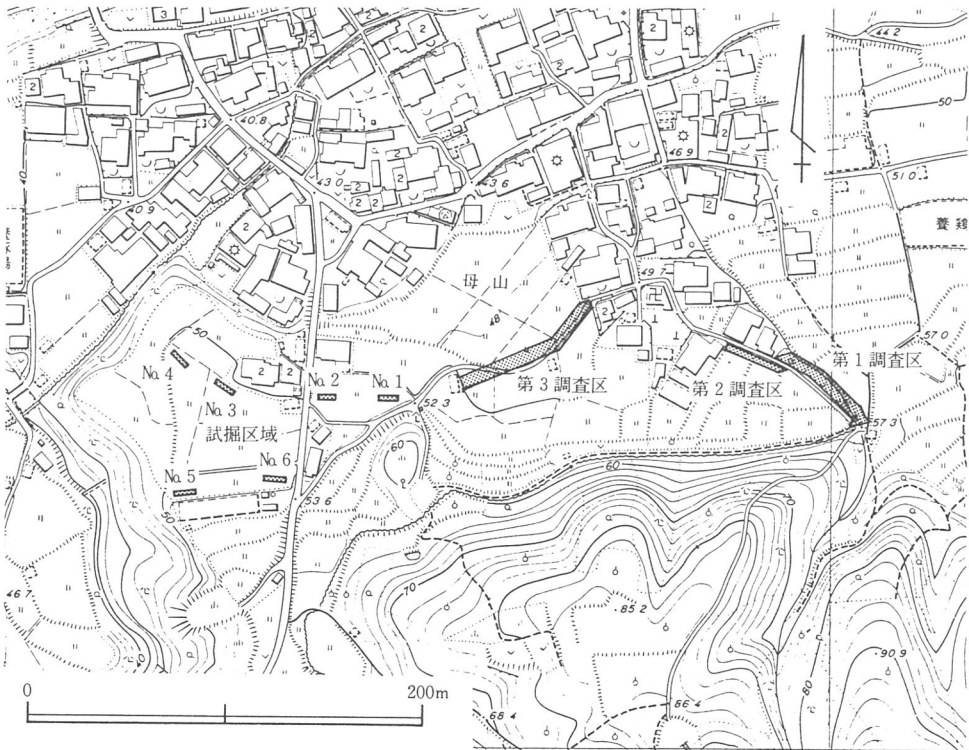
第3節 調査の方法（第3・4図）

発掘調査区の設定は、1988年度の試掘調査の結果とすぐ東隣の川原遺跡の調査結果も勘案することになった。近世の墓石が水路内に確認された第1調査区、現集落が中世集落と重複している可能性を考えて第2調査区、遺構として溝と土坑が検出された第3調査区の3ヵ所が、圃場整備農道部分の本調査区である。なお第1・2調査区は一連のものであるが調査区を市道が縦断しているため、調査区を分けたものである。第3調査区の農道延長部分など、地形的に遺構の存在する疑いのある地点は、まず本調査と同時に6ヵ所の試掘調査を実施し、結果によっては次年度に本調査の必要性が考えられていた。

調査は当協会「発掘調査規程」に従うが、事業発注の形態などの制約から、第3地区については深い谷地形の完掘を行なうことができなかった。試掘調査部分については、明瞭な遺構・遺物を得ず、本調査の実施は見送られることとなった。



第3図 調査区地区割図



第4図 調査区の位置

第2章 調査の結果

第1節 第1調査区の遺構と遺物

遺構（第5図，図版1）

第1調査区は母山遺跡の最東端であり，すぐ南に丘陵裾が迫っている。すぐ北東側30mの川原遺跡の調査では，縄紋晩期と弥生後期の土器片が少量と，12世紀後半の遺構や瓦器碗が検出されており，遺跡の実態把握の期待がよせられていた。しかし，第1地区の大半は縦断する現代水路であり，遺構面を捉えるのはまず不可能と予測された。

一方地元からの聞き取りでは，現代水路敷や水路の側壁の石垣に多くの中・近世の石造塔婆などの墓石を使用したとか，この地点から掘り出したというような話を聞き込んでおり，まずはその遺物回収が目的となっていたのである。

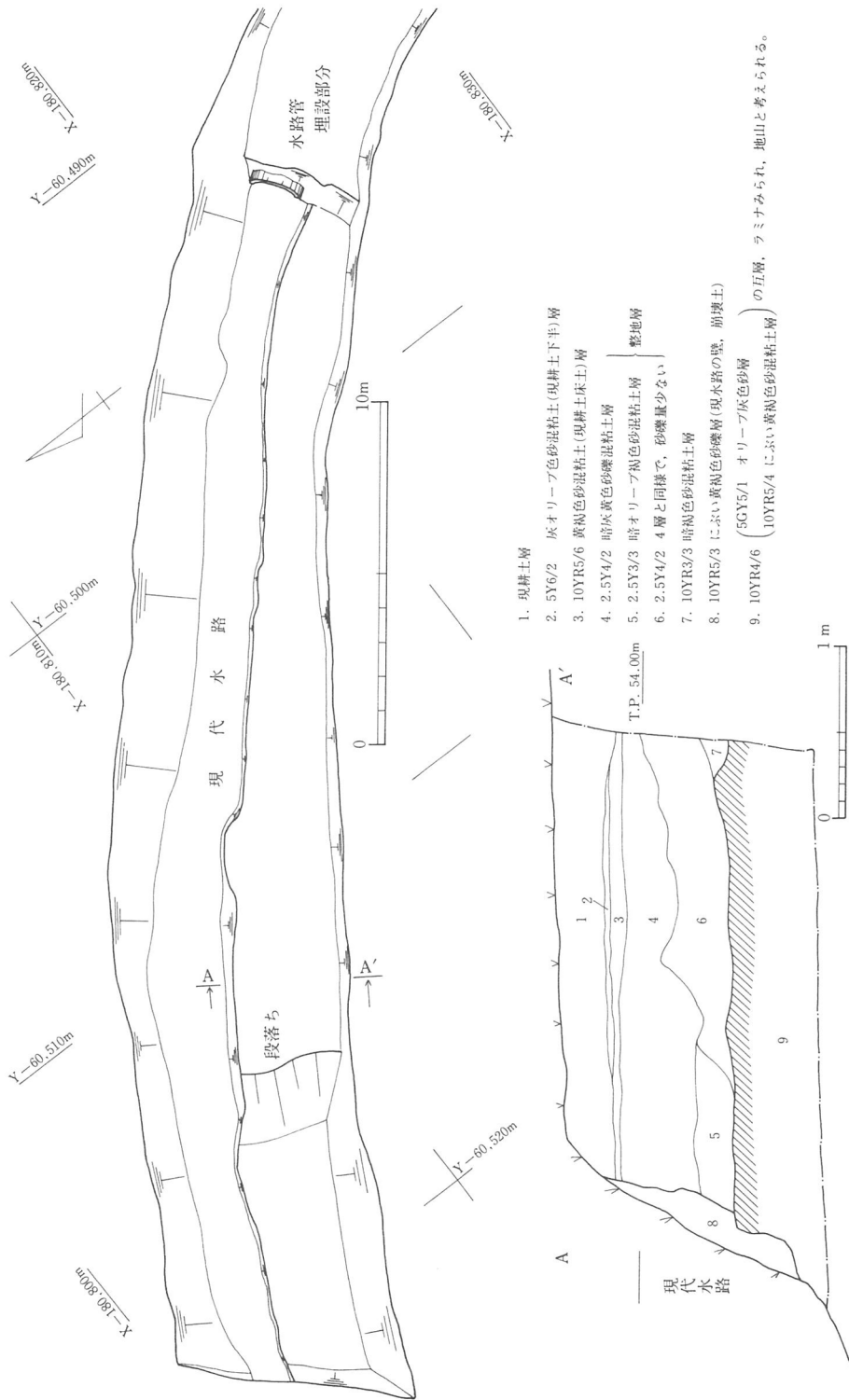
調査の結果，予想どおり水路部分はすでに旧地形・地山まで破壊され尽くしており，遺構面としての旧地形上面は，調査区西側に狭い帯状の部分が残るだけであった。南東から北西へ傾斜し，約1.7mの高低差がある。層位状態の概略は水路際の田畑造成に伴う整地盛土と，その下に丘陵からの自然堆積が認められるという単純なものである。加えて人為的遺構と呼べそうなものは，皆無であった。なお，調査区北半で段状の落ち込みが一ヵ所みられるが，新しい時代の開発行為に伴うものであろう。

遺物（図版1）

旧地形を検出していく過程で，体積土や整地盛土の中からわずかに中・近世の土器片が出土した。しかし，混入の可能性が高く，有意なものとは思われず，実測図作成に耐えるものでもない。

当初注意されていた石造塔婆は，水路の西側石垣内に2点埋め込まれていた。62・63がそれであるが，2点とも直上に地輪が乗せられる五輪塔の台座である。和泉砂岩製と思われる，上面観がほぼ正方形で一辺約23cmと22cmの大(62)小(63)があって，62は厚みがある。

両者とも刻まれた蓮弁は複弁であるが，四隅に弁を配する形態であり，側面観の平面で完全に見えるのは1弁のみである。その左右に，隅なので屈曲した複弁の半分だけが見える。従って結果的に全周して8弁を数える。63は弁も立体的で丁寧に彫られているが，62は刻み方が線刻のみで，単弁のようにも見え，省略・退化が著しい。



- 1. 現耕土層
- 2. 5Y6/2 灰オリーブ色砂混粘土(現耕土下半)層
- 3. 10YR5/6 黄褐色砂混粘土(現耕土床土)層
- 4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂混粘土層
- 5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂混粘土層
- 6. 2.5Y4/2 4層と同様で、砂礫量少ない
- 7. 10YR3/3 暗褐色砂混粘土層
- 8. 10YR5/3 暗褐色砂混粘土層(現水路の壁、前壤土)
- 9. 10YR4/6 (5GY5/1 オリーブ灰色砂混粘土層) (10YR5/4 暗褐色砂混粘土層)の互層、ラミナミられ、地山と考えられる。

第5図 第1調査区平面・断面図

第2節 第2調査区の遺構と遺物

層位（第6図，図版3）

第2調査区は，幅約3m長さ30m余りの細長いものである。西側の断面で観察した結果によると，現耕作土と床土を除去すると，3・4層など黒褐色と灰黄褐色の砂混粘土層が現われ，この層中に後述する長岡京期の遺物が多く含まれていた。これらの層はさほど締まりがなく，14・15・16層などのブロック状の大きな乱れが存在する。この層は砂礫を多く含むバサバサした締まりのない層である。これらは調査中，田畑の開発に伴う整地土と考え，その際の乱れであろうとしていた。遺物も混入されたものか，3・4層が包含層となり，遺構面がその下に存在すると思われたのである。そして遺構面は7層の暗オリーブ褐色砂混粘土層上面として捉えた。しかし，調査後の検討では，14・15・16層などの不自然な堆積こそが長岡京期の遺構そのものではなかったか，と考えるようになった。遺物には完形に復元されるものや，破片が比較的大きかったり，磨耗が少ない破片が多いからである。その意味では，調査結果の再検討の余地が残されることになる。今後調査の機会があるとすれば，ここで注意を促しておきたい。

調査区北半ではやや低くなり，8～12層などの整地盛土が認められ，野壺はその下，5層を掘り込んで検出される。5層の下の13層を遺構面としたが，これは南半の5層の色変化した連続層である。実際に04-00の土坑が掘り込まれるので，先の遺構面認定の再検討からすれば，面は複数存在する可能性がある。なお04-00の時期は不明である。

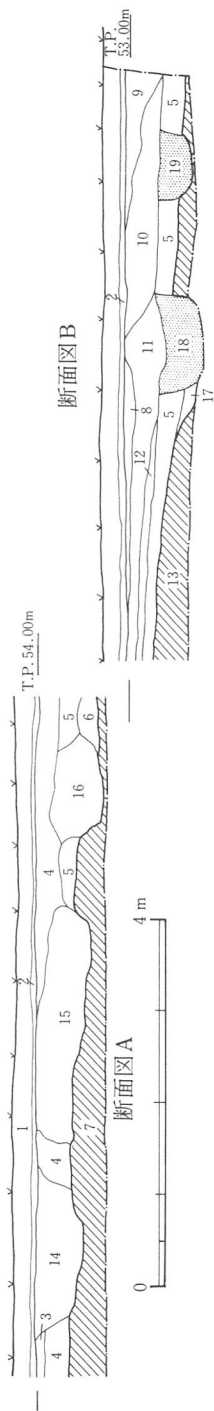
遺構（第6図，図版2・3）

遺構は近代以降と考えられる野壺(03-00など)が6ヵ所みられた他は，性格不明の小穴が8基と，時期・性格ともにやはり不明の土坑(04-00)が検出されたにすぎない。

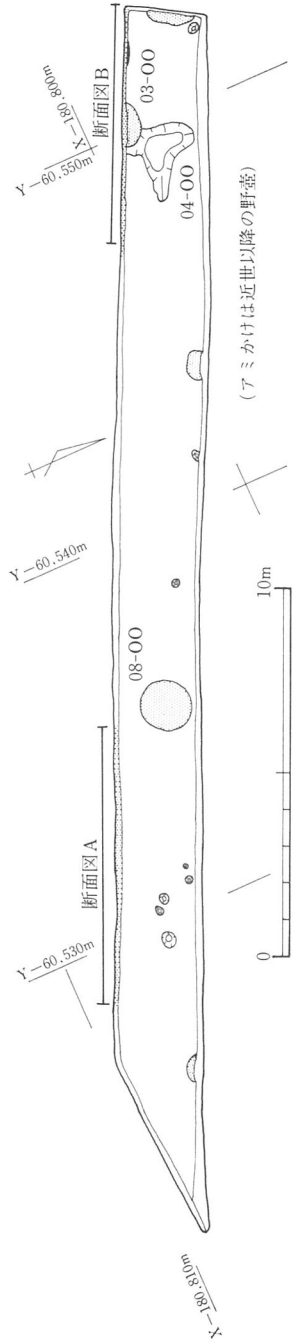
野壺は，現床土から検出される08-00が粘土を周囲に巻いたもので，明らかに保水に気を使った水溜めである。他の野壺としたものは素掘りで，近世以降の瓦片や陶磁器片が出土する。

小穴は浅く，柱穴になるようなものはなく，暗褐色砂混粘土が埋土となっている。遺構かどうかとも積極的に認定しえない。

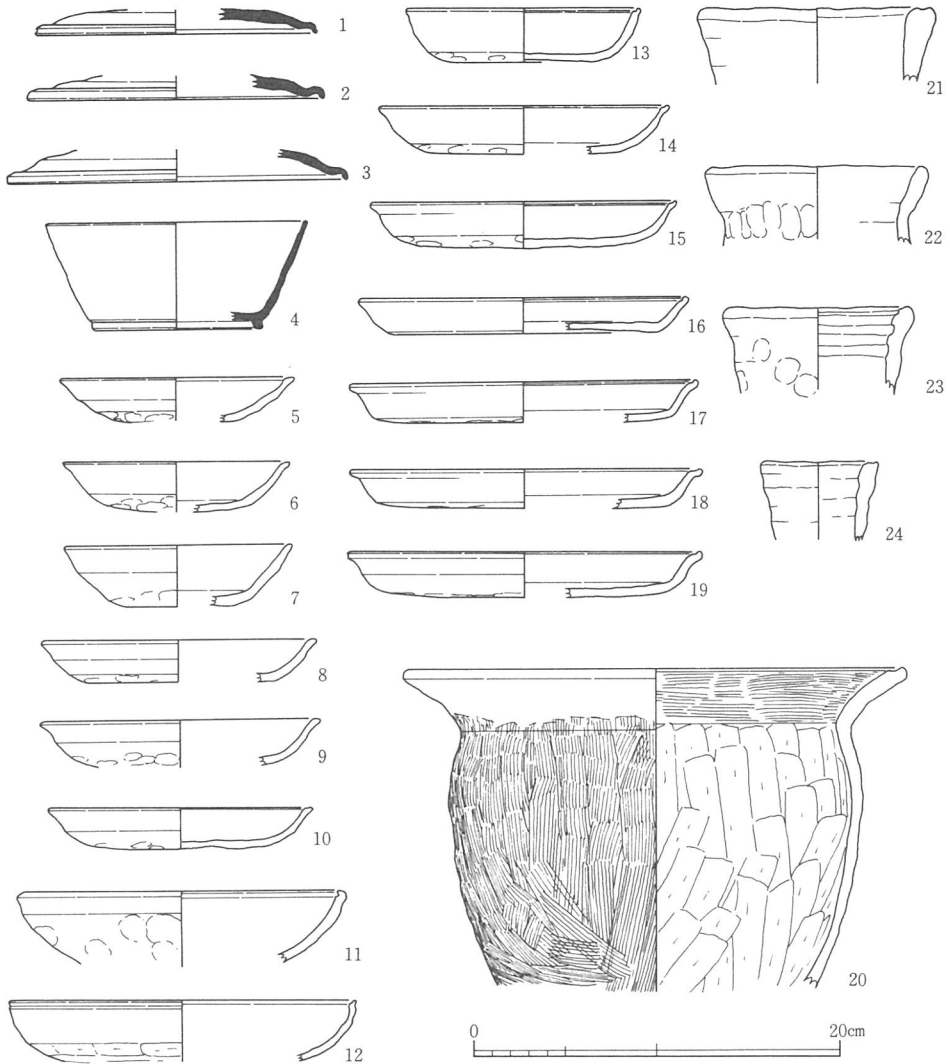
土坑は04-00であるが，不整形なもので深さ約50cmを測る。黒褐色砂礫混粘土層が埋土となっているが，遺物は土器の細片も出土しなかった。以上のように，遺構に関してはみるべきものは検出していない。



1. 現耕土層
2. 5YR3/6 暗赤褐色及び7.5YR5/8 明褐色砂混粘土層(現床土)
3. 10YR3/1 黒褐色砂混粘土層
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂混粘土層
5. 10YR3/1 黒褐色砂混粘土層、一部礫が混る
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色大小礫含むしまりの砂質土層
7. 2.5Y4/4 暗オリーブ褐色砂混粘土層(しまりがないバサバサ土だが、地山と考える)
8. 7.5YR4/2 灰褐色砂礫混粘土層(整地盛土)
9. 10YR4/3 濃い黄褐色砂混粘土層(整地盛土)
10. 7.5YR4/4 褐色砂礫混粘土層(整地盛土)
11. 10YR6/4 濃い黄褐色砂礫混粘土層(整地盛土)
12. 10YR5/3 濃い黄褐色砂混粘土層(整地盛土)
13. 10YR4/4 褐色砂混粘土層=7の変化
14. 2.5Y4/2 暗灰黄色大小礫含むしまりのない層(遺構?)
15. =14 (遺構?)
16. =14(地山より深くなるが側溝内で平面にかからない。遺構?)
17. 10YR2/3 黒褐色砂礫混粘土層、04-00埋土
18. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫混粘土、黄褐色粘土ブロック混る(野臺、03-00)
19. 10YR2/3 黒褐色砂混粘土に礫混在(側溝面で平面にかからない野臺)



第6図 第2調査区平面・断面図



第7図 第2調査区出土遺物

遺物（第7図，図版4・5）

先に述べたように以下の遺物は、第6図の4・5・14・15・16層の掘削中に得たものである。調査区北半部での出土が目立った。遺物には須恵器・土師器・製塩土器の土器類がみられる。時期は概ね8世紀後半から9世紀前後の年代観を考えているが、他の時代の遺物は供伴しないので、明確にはならなかったが遺構が存在した可能性がある。

須恵器 須恵器は土師器に比べて少なく、4点ある。1～3は蓋で、4は高台の付く杯である。3の口径はやや大きく、重ね焼きの色調変化が認められる。蓋の天井部外面はすべ

てナデ仕上げで、杯の高台も底部外縁に近い位置に置き、杯部の外傾度も緩い。

土師器 土師器は小片も含め16点を図示したが、それがほぼ出土総点数である。器種構成としては、杯(5・7・13)、椀(11・12)と皿(8・10・14・19)、甕(20)に分類できる。形態分類は本書独自のものである。解説の前提として前置きしておく、椀・杯・皿類は、成形後に底部内面と口縁部内外面にナデ、底部外面調整はヘラ削りを認める12以外は、成形時の指頭などによる凹凸を残すか、軽くナデ仕上げを行なっている。いずれも焼成は良いが、色調は黄色系と褐色系の2者がある。いずれも暗紋は観察されなかった。

杯は小型で体部がやや湾曲して外傾する5・6、直線的に外傾する7、内湾して立ち上がる13に類別できる。5・6は口縁端部を小さく外折させ、5ではその結果内面に面が生じている。7の口縁端部は丸く収め、底部から体部への屈曲は明瞭である。13では口縁端部内面に沈線が施され、段状になる。13は完形に復元された。

椀としたものは11・12である。体部は大きく内湾するが11は器体が厚く、12はヘラ削りが観察されるうえ、薄い。11の口縁端部は内側に小さく折り曲げ、沈線を廻らせている。12は体部の内湾度が大きい浅い感じを受ける。口縁端部外面には沈線のような細い凹みが廻り、内面は面を持つようであるが遺存状態が悪く明瞭ではない。

皿は口径の小さな8・10と大きな14・19がある。まず口縁部の形態から述べると、小さく外方へ摘み出す8・9と、摘み出して内面に沈線もしくは段が形成される10・14・19がある。18は摘み出すというより外折させた感じである。16・19は底部が平坦で、体部との境界は明瞭な例である。底部外面はナデであるが、成形時の粘土継目が観察できるものが多い。体部の形態は大半が緩やかに内湾しつつ外傾するが、16はほぼ直線的に外傾する。加えて口縁端部は丸く収めて内面に沈線が廻らされている。ここでの形態としては少数派である。

20は甕である。外反する口縁部内面ヨコハケが軽く施され、端部は上方へ摘み上げている。体部外面は粗いハケ、内面はヘラ削りが全体に観察される。

21～24は製塩土器である。いずれも砂粒を多く含み、やや軟質の焼成である。口径は大小があり、口縁端部が丸いものや上面に面を造り出すものがある。外面は指頭による凹みが観察され、23の内面には明瞭な凹線が3条見られる。22は口縁部を外方へ屈曲させている。64は同様の製塩土器で、筒状の体部から口縁部に向かってラップ状に開き始める部分片である。65は筒状体部の破片であるが、器体が薄い。従来から薄いものは、やや体部が長い器形が考えられているようである。

第3節 第3調査区の遺構と遺物

層位（第8図，図版6）

第3地区は幅約6m，延長80mを測る調査区であるが，水路などで3ヵ所に分断されている。便宜上，東区・中央区・西区と呼び分ける。東区は北へ屈曲している他，各区は分断されているため，土層の連続した状況は把握することができていない。

東区の層位を断面図Aで説明すると，現耕作土から下は旧耕作土層の3・4層があり，6層の暗灰黄色砂礫混粘土層に掘り込む17-OXなどが確認され，遺構面とした。ただしさらに下の7層にも中世の土器片が含まれ，6層を地山とは言えない。特に8層などは黒褐色の砂礫層であり，有機物を含む谷状地形が埋没している可能性がある。諸般の事情から6層以下は掘り抜きのみを行ない，地山の確認はしていない。東区の北半は大半市道の整地盛土であり，第10図の遺物はすべてこの盛土から出土したものである。

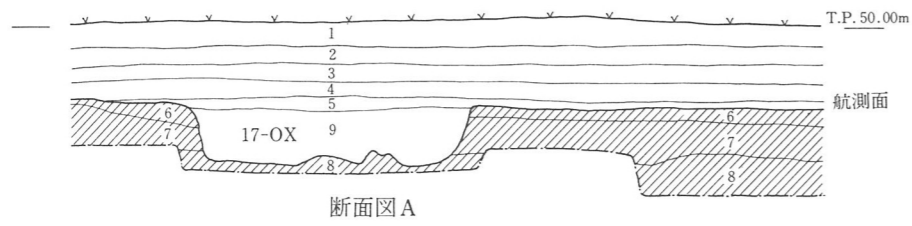
中央区では断面図Bで説明する。まず，調査区を横切る市道の整地盛土があり，東区と同様に旧耕作土層がある。その下には7～11層の灰色系の砂混粘土と砂礫層が厚く堆積する。この層は現地形でも観察される緩やかな谷地形の内部堆積である。第11図の遺物はすべて谷地形埋土として，この堆積から出土した。諸般の事情から第10層の上面で平面図の作成を行なったが，掘り抜き断面の観察では礫を多く含んだオリブ灰色の泥土状のシルト層がT.P.48m付近に現われ，地山と考えている。なお，谷地形の底には12・13層のような流路状落ち込みが見られた。

西区は断面図Cで説明する。他と同様旧耕作土層の下に，5層の黄褐色砂混粘土層があり，6層のブロックを含んでいる。従って6層は地山とすると，5層は開発当初の整地層と考えられる。6層は角礫を多く含み，暗褐色または褐色系の砂礫層で，試掘調査区でも同じ様相のものを全体に確認している。

遺構（第8・9図，図版7～9）

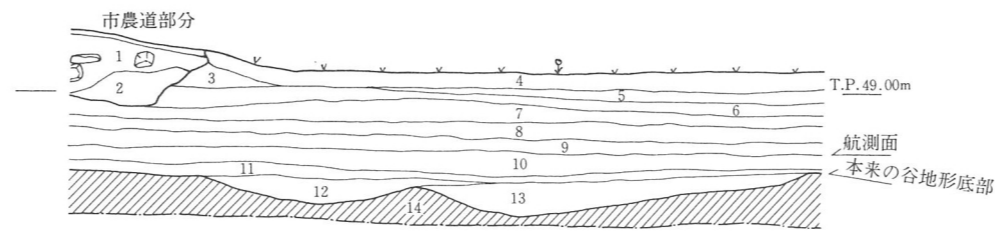
第3調査区では，東区で断面図A 6層で15-OO，16-OX，17-OXを検出した。いずれも性格不明の落ち込みであるが，17-OXは規模も大きく，近世頃の土坑か野壺の可能性はある。褐灰色砂礫の埋土であるが，遺物は得ていない。

石列1は，すぐ北の畑と市道の段を構成する石垣の基底部である。石列に接して水路が造られている。市道設置時かそれ以後の補修によるものであろう。石列2は市道の下に現われたもので，南側の田畑の縁に築かれた石垣の基底であらう。石の大きさは概ね人頭大



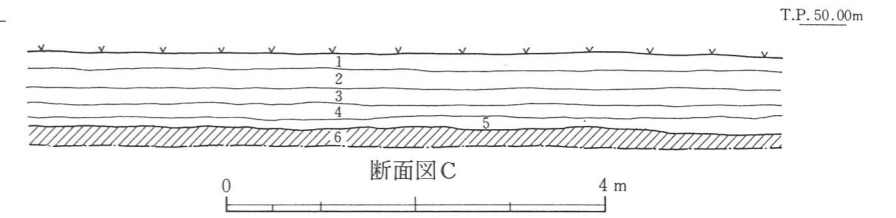
断面図A

1. 現耕作土
2. 10YR5/4 におい黄褐色砂礫混粘土層(床土と旧耕土の重なり)
3. 10YR4/3 におい黄褐色砂礫混粘土層, 炭粒混り
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂混粘土層, やや砂質強い
5. 10YR4/4 褐色砂礫混粘土, 砂粒大きく, 多く含む。
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫混粘土層
7. 10YR3/3 暗褐色砂礫混粘土層
8. 10YR2/2 黒褐色砂礫層
9. 10YR4/1 褐色砂礫層, 中粒砂多く, しまりが無い。17-OX埋土(性格不明)



断面図B

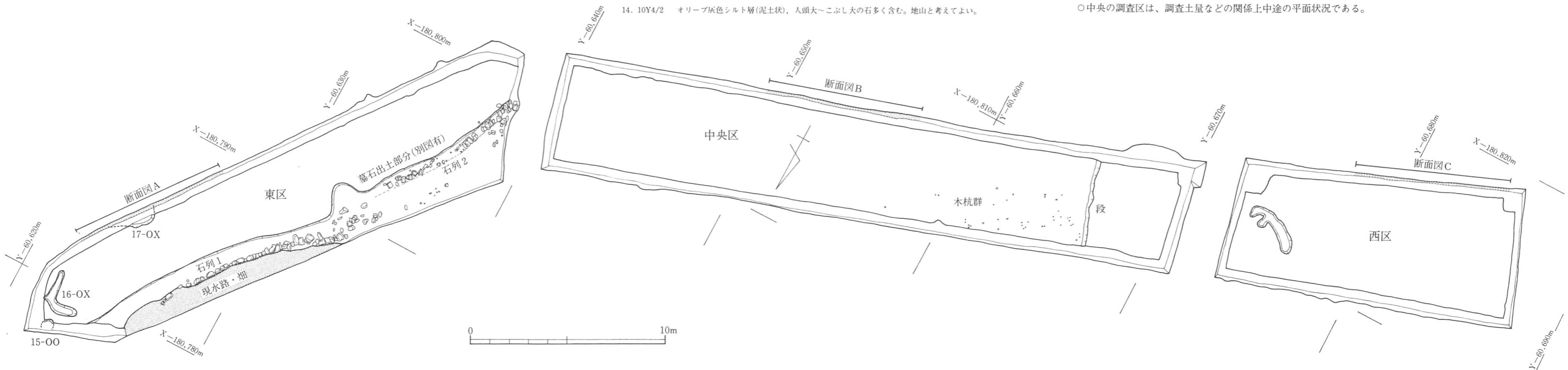
1. 市農道盛土
2. = 1
3. 7.5YR5/1 褐灰色砂混粘土層, 旧耕土
4. 現耕作土
5. 10YR5/3 におい黄褐色砂混粘土層, 旧の耕土と床土
6. 10YR4/2 灰黄褐色砂混粘土層(下半に鉄分沈着著しい), 旧耕土層
7. 10YR4/1 褐灰色砂混粘土層
8. 10YR4/1 = 7でやや砂粒多くなる
9. 10YR4/1 褐色砂礫層
10. 5Y4/1 灰色砂礫混粘土層
11. 10YR3/1 黒褐色砂礫混粘土層
12. 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂混シルト層, 砂多く含む
13. 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂少し混シルト層
14. 10Y4/2 オリーブ灰色シルト層(泥土状), 人頭大~こぶし大の石多く含む。地山と考えてよい。



断面図C

1. 現耕作土層
2. 10YR5/8 黄褐色砂混粘土層(床土), 断面図Aの2と同じ。
3. 10YR4/3 におい黄褐色砂混粘土層, 旧耕土層
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂混粘土層, 旧耕土層
5. 2.5Y5/3 黄褐色砂混粘土層, 黄色の軟質礫や6層のブロック多く含む。初開発時の整地層か。
6. 7.5YR3/3 暗褐色または10YR4/6 褐色の砂礫層。上半鉄分沈着著しく, 人頭大~こぶし大の角礫多く含む。

○本図では調査区が分割されているので、各地区の土層関連は、断面図A・B・C各々完結とした。
 ○中央の調査区は、調査土量などの関係上中途の平面状況である。



第8図 第3調査区平面・断面図

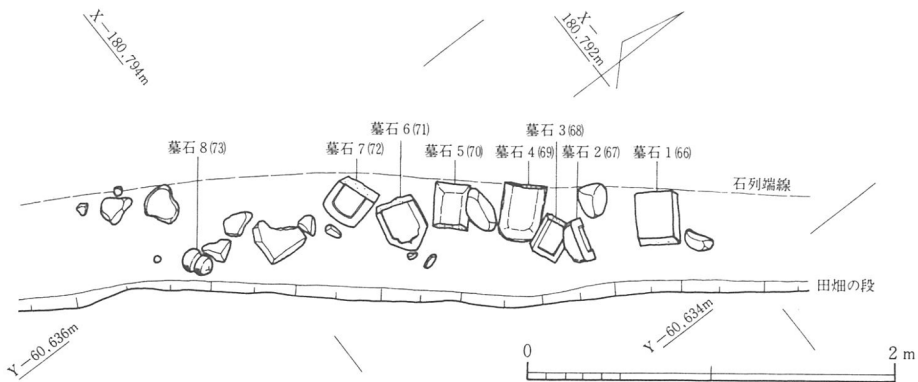
のもので、やや湾曲して一列一段を延長8m確認した。内部には8基の墓石などの石造塔婆姿が転用されている。うち6基は無残に半割されていたので、もともと3基の墓石であった。時期は積極的にできないが、「文化」と刻む石造塔婆があるので19世紀前半以降、少なくとも現在市道となっている農道敷設までに築かれた石列である。

中央区では西区から続く6層の段落ちがあり、東側は古い谷地形が展開している。谷の内部は田畑の重なりが見られ、西半部では木杭が数十本打設されていた。木杭は規則性がなく機能が推定できないが、周辺には中世の土器片などが出土し、この頃の田畑の開発に伴う施設であろうと思われる。

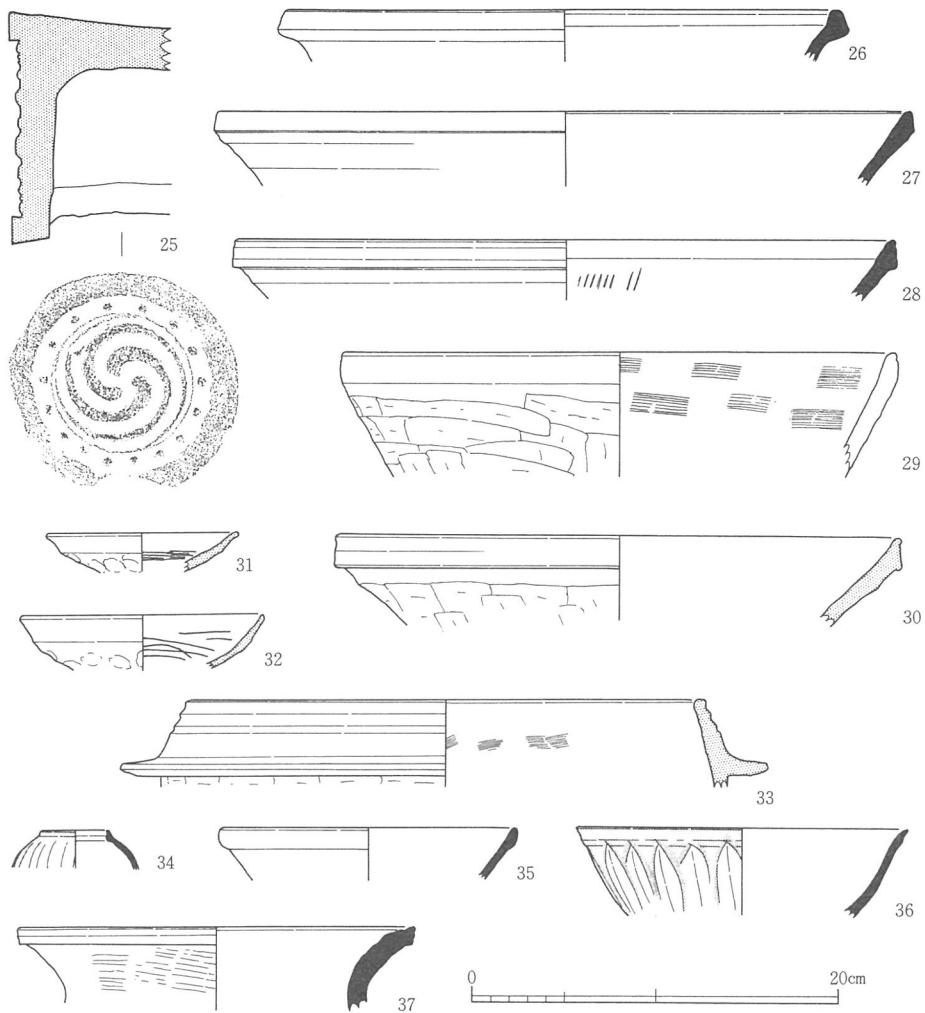
西区では、遺構が存在しなかった。中央区寄りに存在する土坑状のものは、自然の凹みである。

石列2 出土遺物 (第9図, 図版9)

石造塔婆 まず66+72は位牌形塔婆である。表面に外枠と相似の割り込みがあり、内部に宝暦13年未天(1763年)・梵字「ア」・法名を刻む。また枠部下には蓮花が刻まれている。70+71は尖頭形塔婆である。表面内部の割り込みは、上部が五輪塔の空風輪を誇張(変形)したらしい形をとり、寛政4年子天(1792年)・梵字「ア」・法名を刻む。67+69は位牌形塔婆である。表面には上部が一度くびれて丸く収まる割り込みがあり、文化12年亥(1815年)・梵字「ア」・法名を刻む。68は下半部のみで形態や詳細が不明。年号は「□政」辰であり、寛政か文政であろう。墓主は66+72以外は女性である。73は五輪塔の空風輪である。空風一石で、ほぼ同じ大きさである。それぞれに刻まれた梵字は「キャ・カ」であろうが、不明瞭である。以上の石造塔婆は、すべて和泉砂岩製と思われる。年号の違いで形態差があるのは、石造塔婆の編年ができる可能性を示唆するのであろうか。



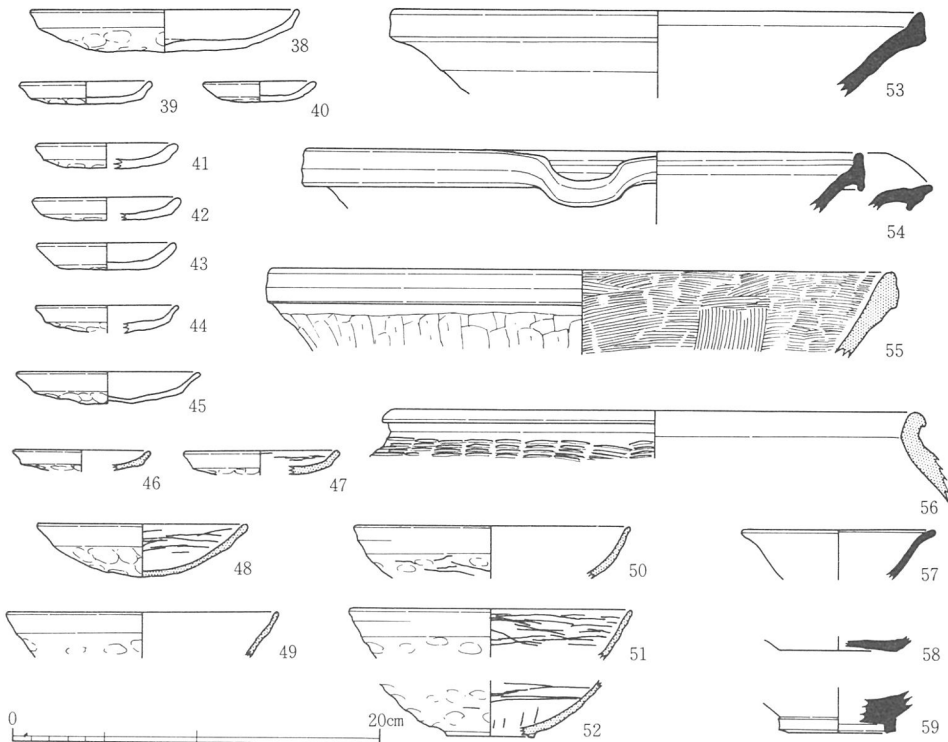
第9図 石列2, 石造塔婆出土状況



第10図 第3調査区，農道整地盛土出土遺物

農道整地盛土出土遺物(第10図，図版10～12)

農道整地土は各時代・各種のさまざまな遺物が混じるが，実測に耐え得るものを抽出した。25は三巴紋軒丸瓦で圏線と珠紋帯が廻る。26・27は須恵質摺鉢，29は土師質摺鉢，30は瓦質摺鉢である。31・32は瓦器鉢，33は瓦質土釜である。28は丹波焼の摺鉢で摺目が見られ，37は常滑焼の甕であって，頸部にタタキ目が消し残っている。34は中国製青白磁の小さな合子身で，いわゆる外面影青と口禿の技法が見られる。35は中国製白磁であるが，やや黄色っぽい色調となっている。36は中国製青磁碗で外面に丁寧な花卉を施す。口縁端部外面には，あまい段が見られる。66も36と同様のものであるが，接合しない。これらは



第11図 第3調査区，谷地形内出土遺物

従来，中国龍泉窯系の青磁とされているものである。以上のことから，農道の整地盛土は周辺の13世紀代～近世の遺物層を削ったものと思われる。

谷地形内出土遺物（第11図，図版10～12）

土師器には皿(38)と小皿(39～45)がある。両者とも底部外面が未調整で指跡を残す他，ナデで仕上げている。小皿の口縁部はナデによって外反するものと，そのまま摘み上げる二者がある。瓦器は小皿の(46・47)と碗の(48～52)がある。碗には高台を付ける(52)ともはや略された(48)があり，ミガキも内面はともかく，1点だけ外面に少し認められる(50)などがある。52では内底面が並行ミガキである。須恵器は(53・54)の摺鉢がある。53は口縁部断面が三角形で，54では摘んで上下に拡張する。瓦質土器には内面ハケ目に摺目と外面ケズリの摺鉢(55)，短い口頸部を持って口縁端部が丸く小さく外反する甕(56)がある。57は中国製白磁皿で灰色を呈するが，表面にはピンホールが認められる。58は同じく皿で平底片である。59は削り出し高台を持つ中国製青磁で，同安窯系と報告されることが多い。谷地形内の厚い堆積は，以上の出土遺物から13～14世紀代から耕作が繰り返され，次第に埋没していったものと思われる。

第4節 試掘調査区の遺構と遺物（第12図，図版12・13）

試掘調査区は，本調査の決定した幅広農道部の延長部分であるが，北西に張り出す台形状の不自然な地形の上に載っている。地形が人為的なものの可能性があり，屋敷地などの遺構の検出が期待されていたのである。結論を先に述べると，旧耕作土層中から若干の中世土器片を得たのみで，遺構も明確なものはいし出せなかつた。

試掘調査区は6ヵ所設定し，規模は2m×10mの長方形のトレンチである。

層位（第12図，図版13）

トレンチの位置から試掘No.1・2，No.3・4，No.5・6がそれぞれまとまっており，No.1・4・6北側の壁の断面図を掲げた。それによるといずれも土層は同様で，単純な堆積状況を認めるものである。まず，現耕作土層と床土を除去すると，黄褐色系の砂混粘土層が数十cm堆積しており，これは旧耕作土の重なりである。

No.1・2トレンチではその下部に7・8層など，地山と考える9層のブロック土が混じる層がある。これは第3調査区の西区で記したように，地山を削平整地した開発行為の最初の整地土ではないかと思われる。また母山近世墓地に近いNo.1トレンチでは，9層が南側の丘陵部から傾斜している様子が看取された。これも9層を旧地形・地山と考える所以である。

No.3・4トレンチでは，旧耕作土層の下には黒褐色または灰黄褐色の土層（5・6層）があり，ここでは炭粒が多く含まれている。これも田畑開発に起因するものであろう。

No.5・6トレンチでは，旧耕作土層の下に，灰オリーブ色や灰色または黒褐色の粘質の土層があり，これにも炭粒が含まれている。No.6の地山は8層のにぶい黄橙色粘土層であり，他が褐色系の砂礫混粘土層であったのとはやや異なる。No.5では地山が京上川に向かって落ちる際にあたり，傾斜を幾度かの盛土で整地している様子が認められた。

遺構

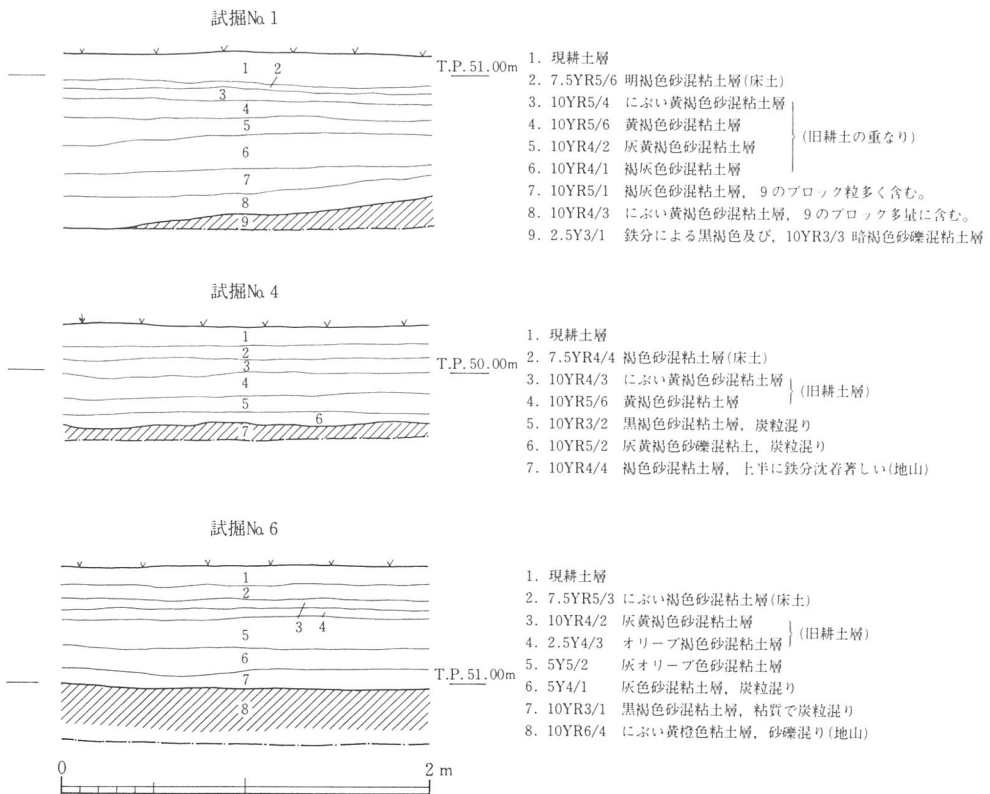
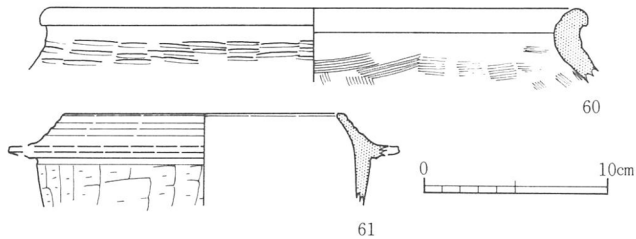
遺構は先に触れたように，試掘調査区内では少なくとも認めていない。ただNo.3トレンチでは，地山の凹みがいくつか存在したが，遺構というより自然の凹凸であろう。

遺物（第12図，図版12）

各トレンチからは少量の遺物が出土したが，ほとんどが旧耕作土層中に含まれる遊離遺物である。遺物の時期は中世以降を中心とし，古代以前のものをほとんど見出ししていない。ただ，No.6トレンチには古墳時代後期の須恵器片がわずかに検出された。

実測に耐える遺物は2点ある。60・61は瓦質土器で、60はNo.6 トレンチ、61はNo.1 トレンチの旧耕作土下層から出土したものである。

60は短い頸部に丸い口縁部が特徴の甕で、外面にはタタキ目、体部内面には軽くハケ目が見られる。焼成が不良で、白っぽい。61は土釜であるが、内傾する口縁部外面には3段の凹線、口縁端部上面には面を持つ。鏝端部は失われている。体部外面にはヘラ削りを施す通有のものである。これも焼成は不良で、土師質のように見える。



第12図 試掘調査区断面と出土遺物

第3章 ま と め

母山遺跡の発掘調査はどちらかと言えば小規模で、調査の制約も多いものであった。しかし、わが国の中世史研究の上で、絵図や九条家の荘園で有名な日根荘を北に望む丘陵裾にあたり、母山集落の形成や立地の問題、生産基盤開発の状況など、さまざまな観点からみれば、たとえ少ない調査成果であってもなんらかの歴史に対する発言を展開させることが可能であろう。

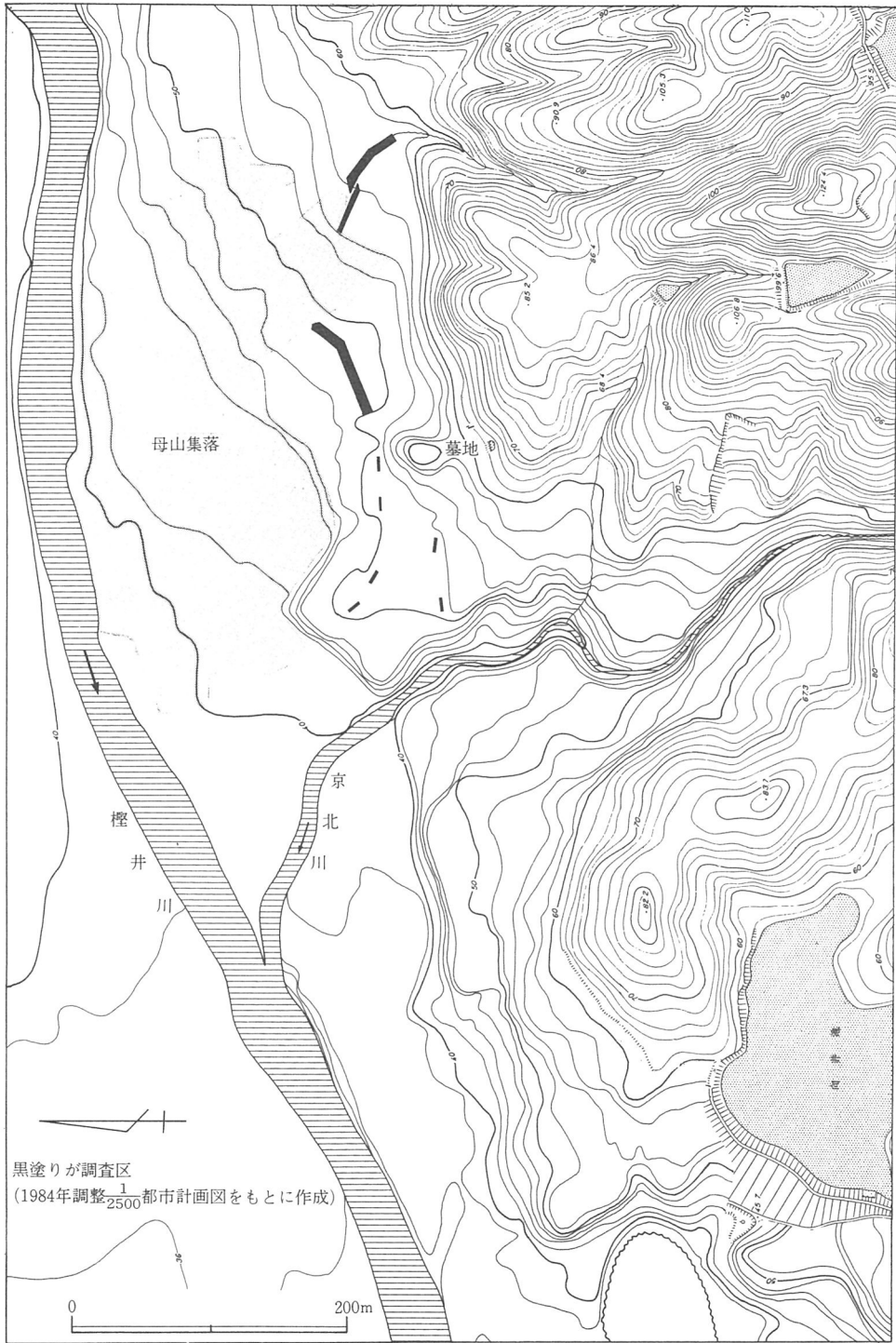
遺跡は母山地区の南側に広がる和泉山脈の裾にあたり、急傾斜が緩傾斜に変化する付近である。しかし傾斜地であるから現在の田畑も複雑な棚田となっており、まとまった平坦面を得ることは困難な地形環境にある(第13図)。このような場所に展開する遺跡とはどのようなものか、以下に調査結果から若干の感想を述べてみたい。

まず、触れておかなければならないのは、長岡京期の遺物が比較的まとまって出土している点である。残念ながら遺構については不明確であるが、小さな調査区から多くの土器を見出していることと、製塩土器を伴うことから、この時期の人間の生活跡が存在した前提を設けるのも無理なことではあるまい。ただし、遺物はその集落の性格を指し示すようなものがない。この9世紀前後の集落は小規模で短期的な営みで終わっている。8世紀前半も10世紀代の遺物も、調査では見ていないからである。従って長岡京期の遺物は、自然的な村落の成立とか恒常的開発の開始を物語るものではない。

ところで、すぐ東側の川原遺跡の調査でも先立つ試掘調査でも、縄紋時代や弥生時代の土器・石器がわずかながら発見されている点を重視すると、意外にこの地に分け入った人間の歴史は古い。実際すぐ西隣の棚原遺跡では同レベルの丘陵斜面や台地上に弥生時代中期頃の竪穴住居が検出され、一時的にせよ定住の地として選ばれていたのである。その後の母山周辺は、奈良時代までの約700年間ほとんど欠史の時代が続く。いずれにせよ母山集落の形成と、本格的開発がこの地に始まるのは、遺物などから少なくとも12世紀後半以降のことである。母山近世墓地の存在や、周辺から出土する石造塔婆群は、中・近世村落の存在を物語り、もし集落跡があるとすれば現母山集落と重なっている可能性が大きい。

なお石造塔婆群の本来の所在地は不明であるが、近世墓地とその周辺は今後の注意が必要となろう。これらは両墓制の歴史・民俗史料としても貴重である。

簡単であるが、以上を母山遺跡調査結果のまとめとしたい。



第13図 遺跡周辺の地形

写真図版





(南東から)



62



63

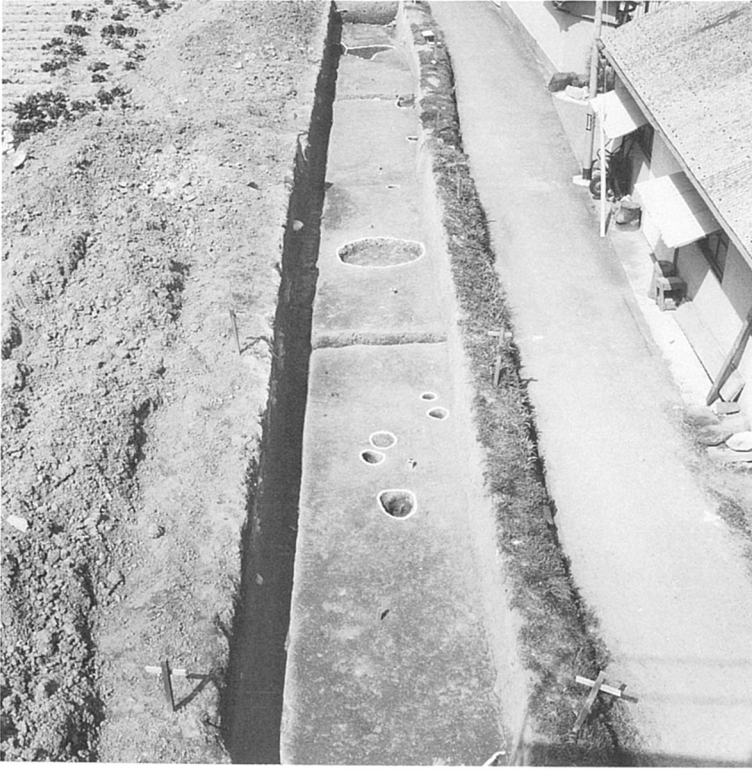


62

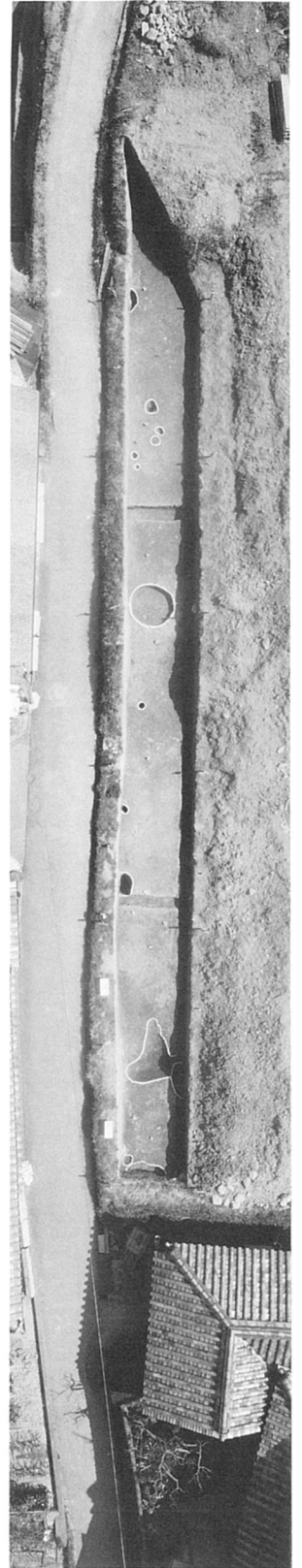


63

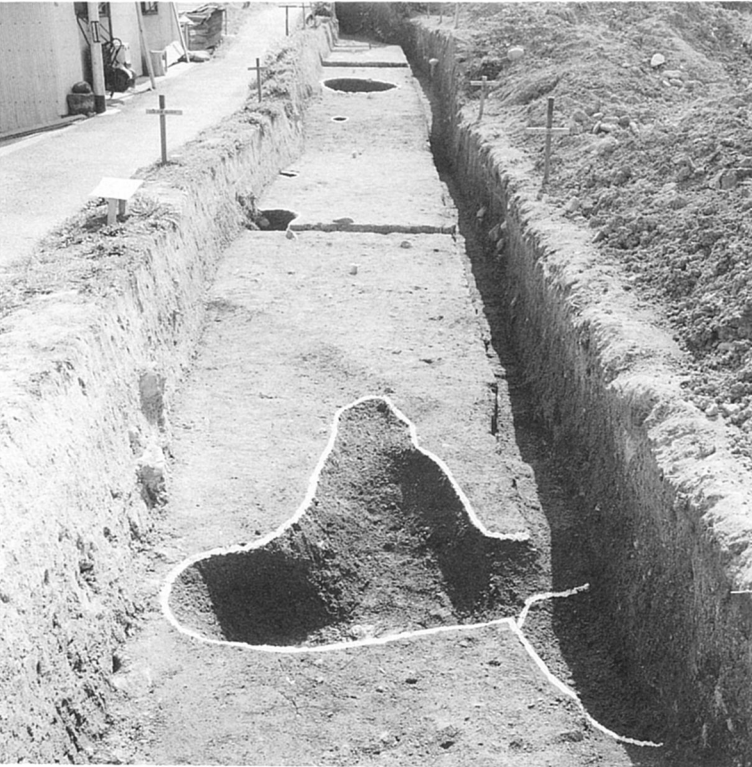
現代水路の石垣内出土石造塔婆



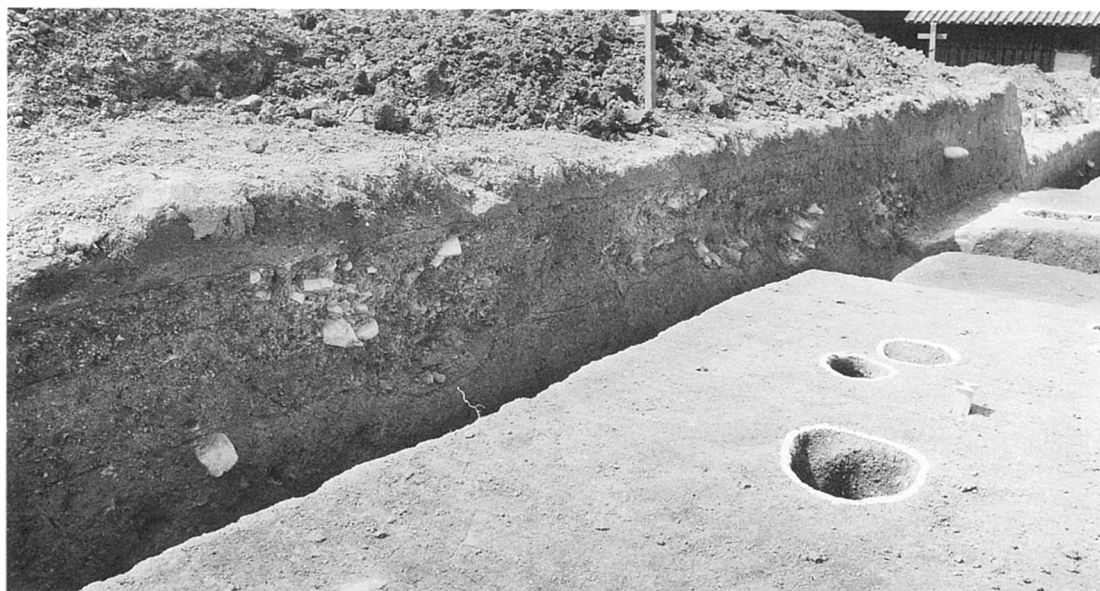
(南東から)



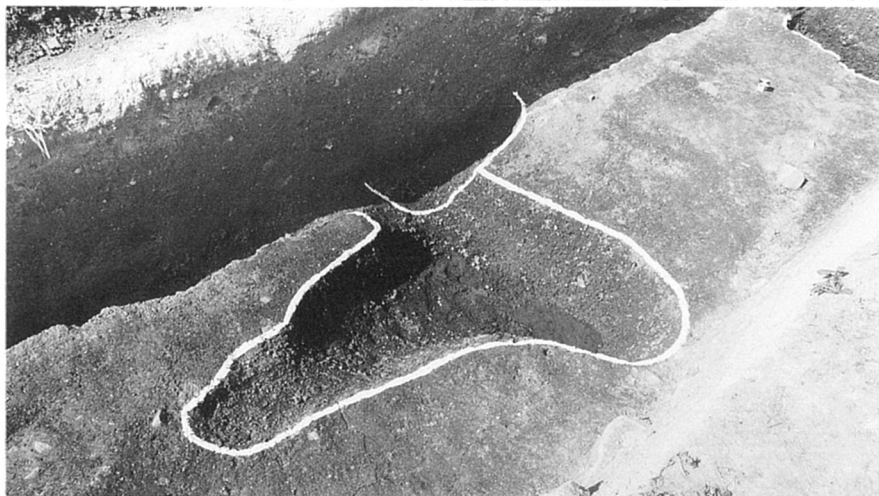
全景



(北西から)



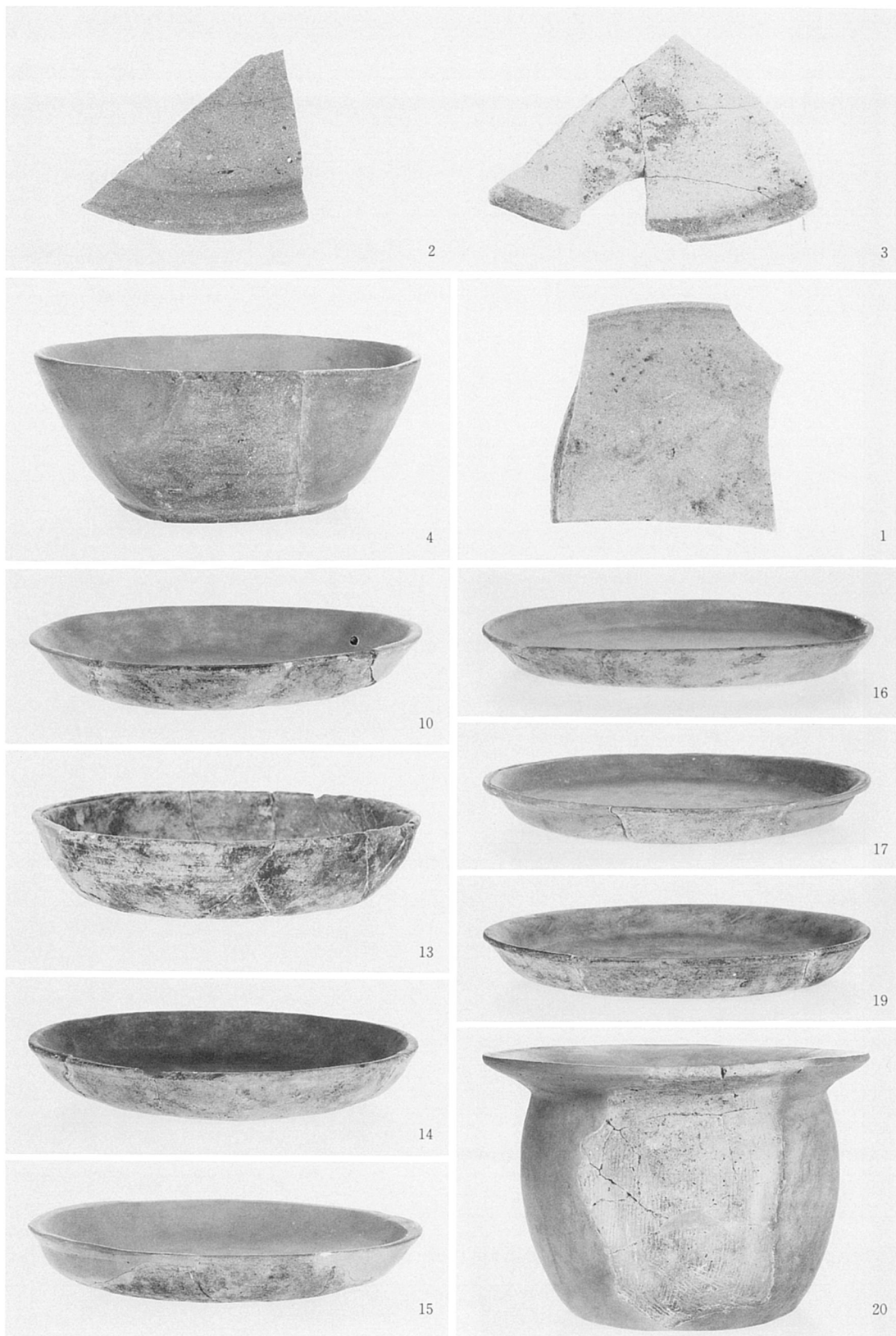
南西側壁



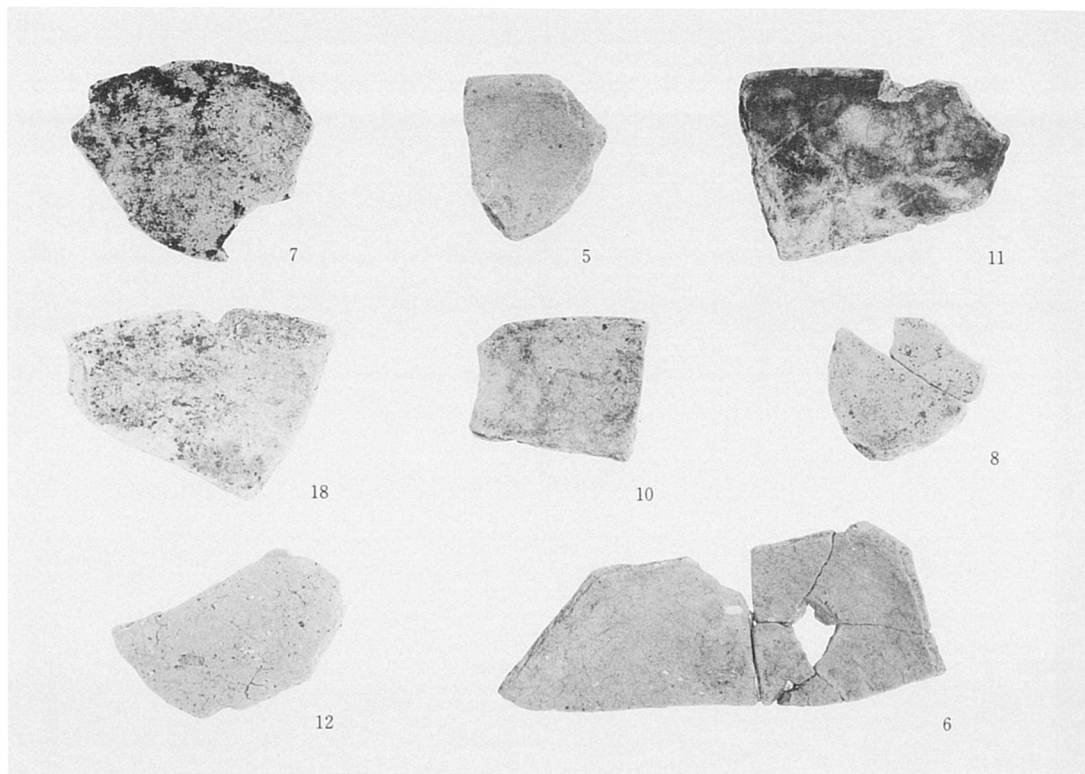
04-00



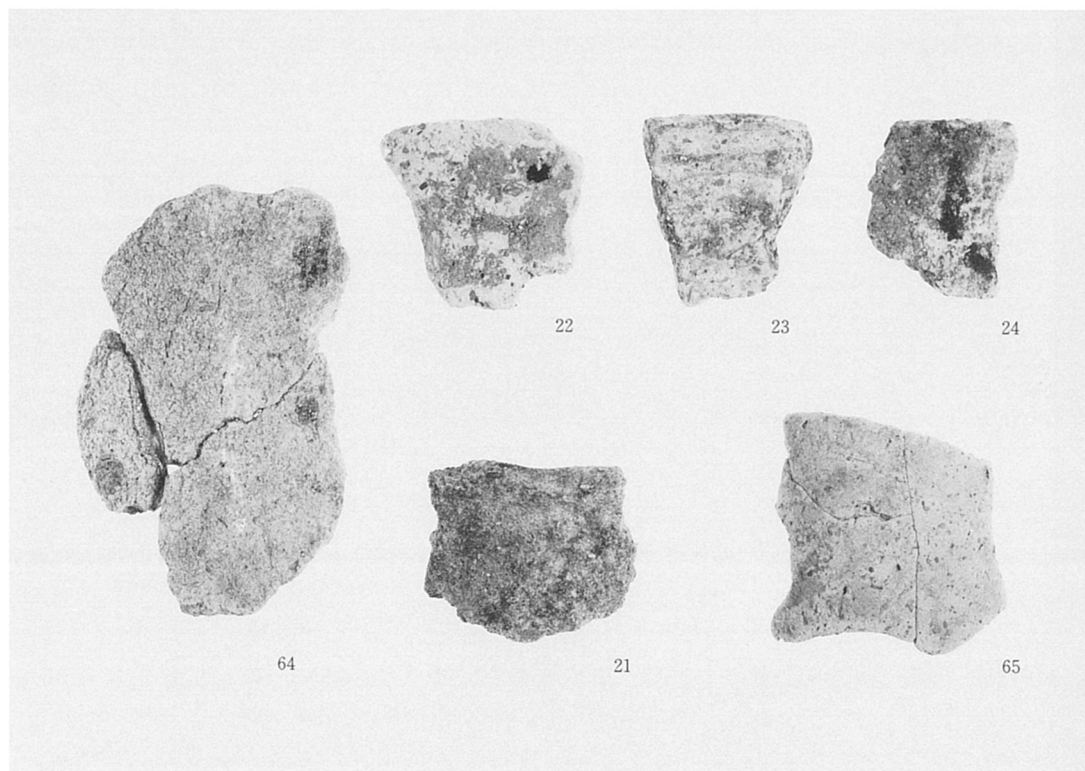
野壺 (08-00)



須恵器, 土師器



土師器



製塩土器



調査区東部



調査区中央、谷地形



(東から)



(西から)



16-OX



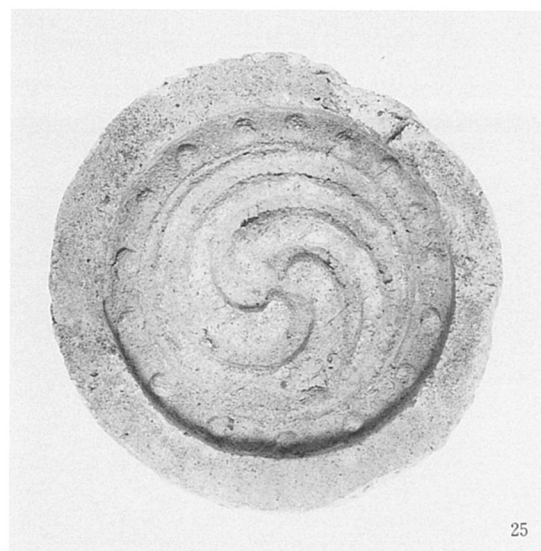
17-O0



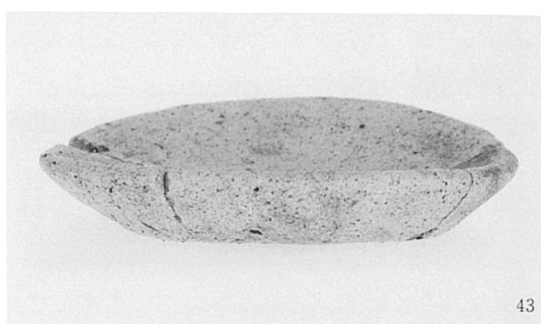
段と谷地形内の木杭



石列2の石造塔婆出土状況



25



43



38



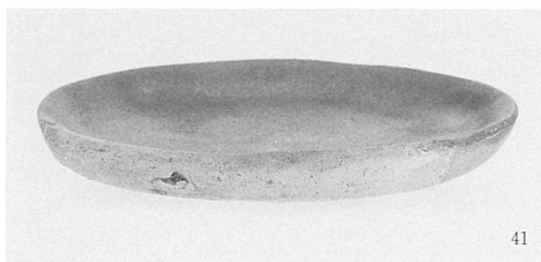
44



39



45



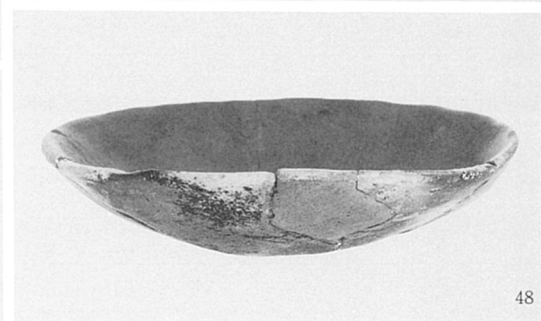
41



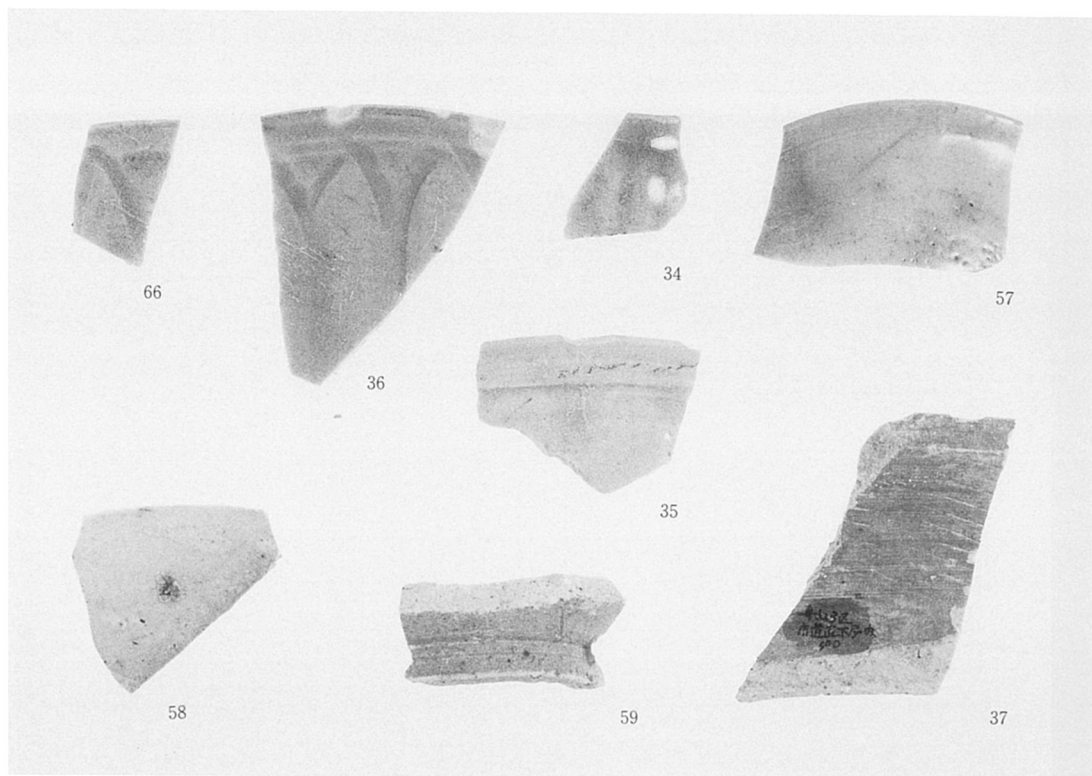
46



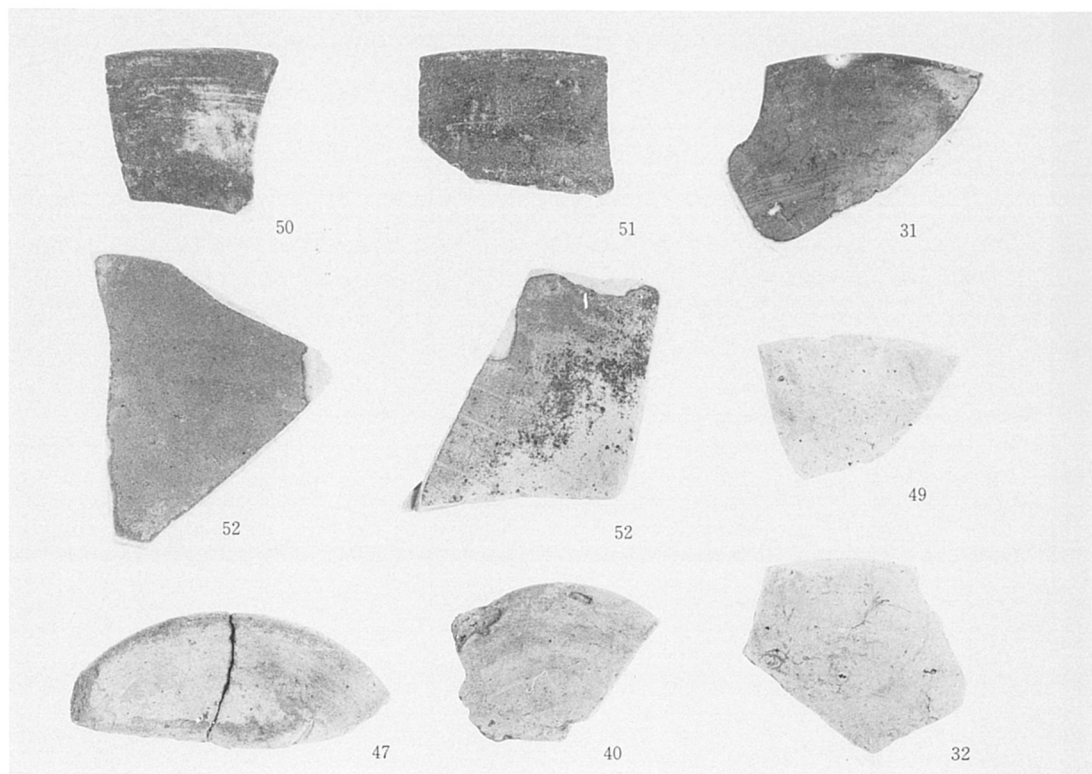
42



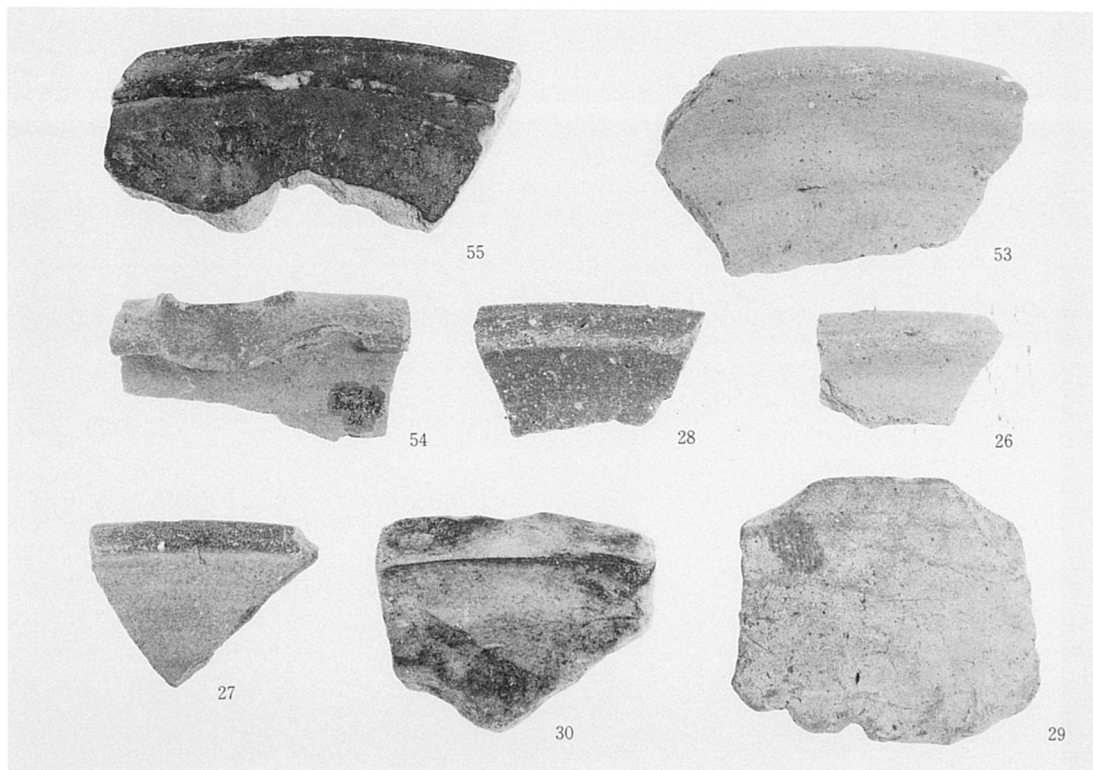
48



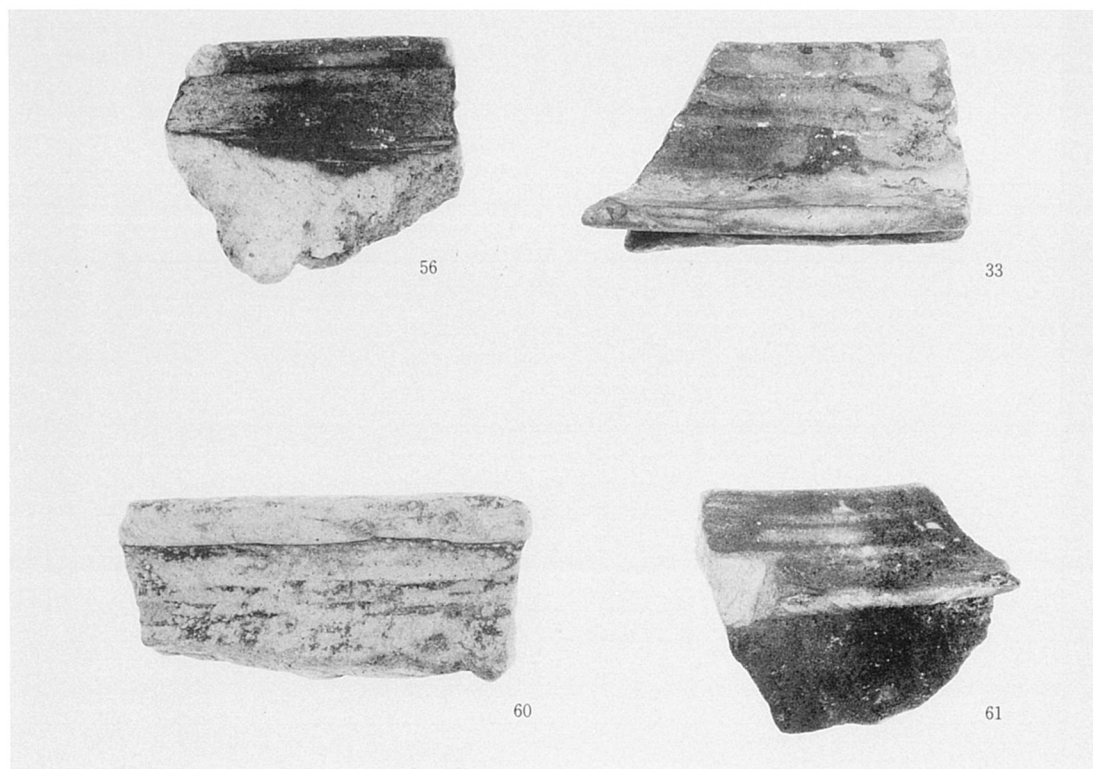
外国製陶磁器類



土師器、瓦器



各種摺鉢



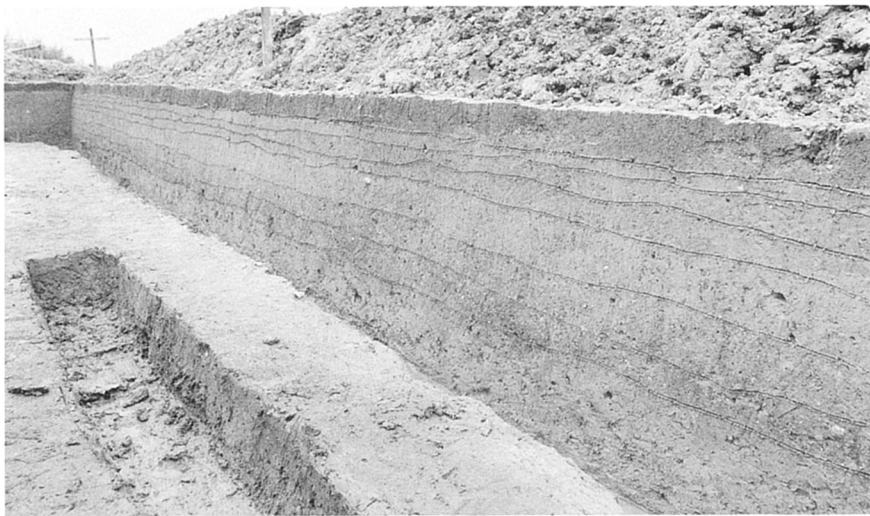
瓦質土器, 60・61は試掘調査区出土



試掘
No. 2



試掘
No. 4



試掘
No. 6

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第67輯

母 山 遺 跡

泉佐野市上之郷母山地区土地改良事業に伴う発掘調査報告書

1991年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

